

〔書評〕

「世界史」叙述はどうあるべきか

羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』をめぐって

光田 剛

羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』（岩波新書）は、二〇一一年九月に刊行された。東日本大震災と福島原発事故の経験が、まだ生々しく日本社会に、そして世界に記憶されていた時期、そして、九・一一大規模テロからちょうど十年めの月である。

本書の構成を最初にごく簡単に紹介する。著者は「地球市民のための新しい世界史」を構想している。歴史には「現実を変える力」（二頁）があると著者は言う。「地球市民」のために、地球規模の市民社会が生まれているとも言えない「現実」を変えるために、「新しい世界史」は構想されるのである（序章「歴史の力」）。第一章「世界史の歴史をたどる」では、日本での「世界史」の現状と、それが構成されてきた歴史が語られる。第二章「いまの世界史のどこが問題か？」では、フランスや中国での「世界史」についても触れた上で、「いまの世界史」の問題点が挙げられる。第三章「新しい世界史への道」では、第二章で挙げられた問題点をどう「超える」べきかが示される。第四章「新しい世界史の構想」では、著者や著者の属する共同研究グループが構想する「新しい世界史」の構想の概

要が示される。終章「近代知の刷新」では、著者自身の研究歴を振り返りつつ、「新しい世界史」が「近代」の「人文社会科学知の刷新」を目指したものであることが宣言される。

ここでは、まず、終章に述べられている著者のプロフィールから紹介したい。

著者によれば、著者は一九七〇年代にサファヴィー朝史の研究者として出発した。次に、一九九〇年代には著者は「イスラーム世界」の研究者であると自認した。そして、現在は「世界史」の研究者であるという（はじめに：1頁）。著者の自己紹介は禁欲的である。たとえば、サファヴィー朝史研究者だった時代について、本書では九四〇九八頁に、イラン人にとっての外国人がサファヴィー朝史の研究をすることの意義に悩んだ時期として紹介される。しかし、その成果を、専門家以外の読者向けに書き下ろした『成熟のイスラーム社会』（永田雄三と共著、中央公論社、一九八八年（フルカラー版））を読めば、著者のサファヴィー朝史研究が、奥行きと幅広さを兼ね備えたものであることがわかるだろう。ここで問題にされている、外国人がサファヴィー朝史を研究する意味についても、この著書でいちおうの答えが示されている。また、本書の第四章を読んだだけでは、ややつかみどころがなく、ただ難解なだけのもという印象を持ってしまう「新しい世界史」についても、たとえば著者が著した『東インド会社とアジアの海』（講談社「興亡の世界史15」、二〇〇七年）がたとえばその成果の一例だとして示されたならば、その印象は一新されるだろう。「興亡の世界史」シリーズのなかでもとくに魅力的な一冊だからである。もっとも、『東インド会社とアジアの海』は、口絵ページに「世界貿易の中心だったインド洋海域」とあって、著者が『新しい世界史へ』で否定している「中心史観」をいちおう採用しているし、また『新しい世界史へ』で同様に不必要としている「時系列的」な叙述になっているので、著者自身は「新しい世界史」の一冊としては不十分と考えているのかも知れないが。

著者の経歴を、本書『新しい世界史へ』の自己紹介以上に詳しく記したのは、序章の論調があまりに理想的に感じられるかも知れず、また、第四章の提言があまりに大胆で、かえって歴史研究の「現場」をよく知らない知識人の軽はずみな発言のようにも読まれてしまうからである。しかし、そうではない。「古い」歴史研究に十分に豊かな成果を残している著者が、ここに書かれていないものも含めて、さまざまな経験とそこで得た葛藤を経て構想したものがこの「新しい世界史」なのである。

そのことを押さえた上で、本書の内容をやや詳しく紹介していきたい。

序章(二〇―二一頁)では、先に触れたように、最初に歴史には「現実を変える力」があると宣言される。しかし、現在の歴史学には、その力が感じられないと著者は言う。一方で、現在の世界では、人びとが国や地域の枠にとらわれない「地球社会の一員」・「地球市民」としての意識を持つことが重要であるのに、それが十分ではないとする。それでは、「新しい世界史」の役割とは何か。それは、人びとを「地球市民」へと変えて行く力を発揮することである。

第一章では日本での「世界史」(「いまの世界史」)の現状と成立史が述べられる。まず、高校の学習指導要領を読むことによって、高校教科としての「世界史」が、日本史と対になる「世界史」として構想されていることが明らかにされる。それは、「国際社会」が「日本国民」であることと対に提示されていることと並行の関係にある。また、叙述面からは、近代までは世界各地の歴史の並列で叙述が進み、近代にはヨーロッパ中心の歴史観が採られるという特徴を著者は挙げている(一五―二二頁)。

このような「世界史」像を最初に打ち出したのは、著者によれば、一九六〇年に上原専祿を代表として共著として

出版された『日本国民の世界史』（岩波書店）であった。「日本国民」として学ぶべき世界史を意識したという点でも、世界の歴史をいくつかの地域に分けて叙述したという点でも、本書の役割は大きいという（四二～五〇頁）。それまでの歴史は、ヨーロッパの歴史学をそのまま受け入れて始まった西洋史と、江戸時代以来の研究をもとにした国史、そしてその中間を埋めるようにやや遅れて創設された東洋史の三区分が基本だった（二三～二九頁）。これに対して、『日本国民の世界史』の「世界史」像はたしかに斬新であり、また、その時代の日本国民の関心にも合致していたことを著者は述べる。それが一九七〇～九〇年代にかけて学習指導要領に取り入れられ（三八～三九頁）、現在の高校世界史ができあがったというわけである。なお、ここでは、高校で「世界史」が教えられているのに、旧態依然として「東洋史／西洋史」という区分を採用している大学の「後れ」が批判されている（三二～三三頁）。また、本書ではほとんど注目されていないが、東洋史が「支那史」・「漢人の歴史」を超えるものとして構想されたという宮崎市定の指摘（二七～二八頁）も、私は重要であると思う。

第二章では、現在の「世界史」の問題点が、三点にわたって論じられる。

まず、国によって「世界史」とはどういうものかの認識が異なり、現状のままでは「世界史」どうしの対話も容易でないことである。例として、フランスの歴史教科書と中国の世界史教科書が挙げられる。フランスの歴史教科書が教える「歴史」は、あくまでフランス中心の歴史であり、フランス以外の世界のできごとは、フランス史との関連でのみ、断片的に言及されるだけである。したがってアジア史の叙述などは極端に少ない（五五～五九頁）。ただし、フランス以外の世界のできごとが断片的にしか言及されないことについては、著者は否定的には捉えておらず、そのような歴史叙述も可能であるとして、第四章につなげている（五九頁）。これに対して、中国の「世界史」とは、端

的に「中国以外の世界の歴史」であって、ここでは中国の歴史にはほとんど言及されない（六一～六六頁）。つまり、「日本国民」が「国際社会」で主体的に活躍することを目標に作られている日本の高校世界史の教科書と、フランスの高校歴史教科書、中国の高校世界史教科書とは、そこで描いている「歴史」・「世界史」の性格がまったく違う。これでは、たとえば、どの国の世界史も、その国の国民が国際社会で活動できるようにするために編まれている、という前提で対話しようとしても、対話そのものが成立しない。

第二に、現在の「世界史」は、「私たち／彼ら」や「自／他」を区別するための「世界史」となっていて、それは、現状を追認するイデオロギーを強化するものとなっているという点である（六七～七〇頁）。つまり、「日本人」は過去からずっと「日本人」であり、それは「中国人」・「朝鮮人」・「ヨーロッパ人」ではないという、現在の「日本人」のあり方を追認する役割を果たしている。端的に言えば、ナショナル・アイデンティティーや、ヨーロッパなどの地域のアイデンティティーを強化する役割を担っているということであろう。なお、ここでは、議論の焦点が「イスラーム世界」という認識の問題性に集中して（七〇～七六頁）、著者が何を論じているのかがやや把握しにくい。これはこれで重要な論点であり、また、注意深く読めば本論との関係も理解はできるのだが。

第三に、現在の「世界史」は「ヨーロッパ中心史観」であることが最大の問題であるという（七七～八一頁）。この問題提起はやや主観的な印象を与え、たとえばパートの「フランス・フェスティバル」や「イタリア・フェア」には必ず人が押し寄せる、といったような表現も見られる（それを言うなら、トルコ・フェスティバルにも人は押し寄せるし、日暮里のベルシア料理店はいつも満員であるが、それは私たちがトルコやイランの歴史に理解を深めたことをあまり意味しない）。ただし、ここで述べられていることは、本書の理解にとって重要である。歴史叙述、とく

に近代世界の歴史の叙述の「中心」となっている「ヨーロッパ」は、地理的なヨーロッパとそこで活動していた人びとそのものではなく、そこからいかにヨーロッパらしい特徴を抽出して構成された概念としての「ヨーロッパ」だという指摘である（八五～八七頁）。つまり、「大航海時代」にはスペインとポルトガルが「ヨーロッパ」を代表し、ルネサンスではイタリアが「ヨーロッパ」を代表し、産業革命ではイギリスが「ヨーロッパ」を代表する。他方で、「大航海時代」の開始当時にはイギリスがヨーロッパの辺境に過ぎなかったことにも注意は向けられない（八三～八四頁）。実在したヨーロッパとは異なる、「概念」化された「ヨーロッパ」が歴史叙述の中心となり、しかも、日本ではそれが外国史叙述の中心に位置づけられてきた（八五～八九頁）。これが最大の問題だというわけである。

以上、第二章で挙げられている三つの問題点のうち、以下の章で力点が置かれるのは、第二と第三の論点の組み合わせである。つまり、世界史叙述に深く根を張る「ヨーロッパ／非ヨーロッパ」という区別、また、「ヨーロッパが中心であり、非ヨーロッパは周縁である」という「中心史観」である。

第三章では、まず、今後の外国史研究者は「国の枠にこだわらない世界史」を構想しなければならないとされ、「地球社会の世界史」の研究へと進むことに大いに意義があるとする（九二～一〇〇頁）。かつて著者が日本人のイラシヤ史研究者として感じつづけた葛藤がここで描かれる。また、そのような世界史叙述として「グローバル・ヒストリー」があるのではないかという議論に対しては、少なくとも「英国人」の「グローバル・ヒストリー」はイギリス中心史観の変種であり、自分たちの目指す「新しい世界史」とは異なる、と釘を刺している（一〇〇～一〇二頁）。

続いて「ヨーロッパ中心史観を超える」必要が論じられる（一〇四～一一〇頁）。ここは第二章の議論の延長であ

る。さらに、それに続いて、「ヨーロッパ中心史観」に対抗して主張される「イスラーム中心史観」（一一〇～一一五頁）、「中国中心史観」（一一五～一二七頁）、「中央ユーラシア中心史観」（一一八頁）、「日本中心史観」（一二八～一三〇頁）なども超えなければならずと著者は主張する。なお、ここでいう「中心史観」は、少なくとも「中国中心史観」と「日本中心史観」については、「ヨーロッパ中心史観」の「中心史観」とは意味が異なるように思う。「中国中心史観」は華・夷システム（華夷秩序論）のこのようなのだが、第一に、華夷秩序論では「ヨーロッパ中心史観」が近代「世界史」全体を語るようには「世界史」を語れないし、第二に、華夷秩序論に対しては研究者は「ヨーロッパ中心史観」とは異なって十分に距離を取っている。「ヨーロッパ中心史観」批判は、概念としての「ヨーロッパ」に日本人研究者が距離が取れないことを問題にしているのだから、「中国中心史観」とは位相が異なる。また、ここで「日本中心史観」というのは、大東亜共栄圏イデオロギーなどのことではない。ここで述べられているのは、ナショナル・ヒストリーとしての日本史は必要であるが、それは「新しい世界史」とは異なるものであるということである。さて、著者の議論は先に進んで、「中心と周縁」という見かた自体を否定しなければならないところまで行き着く。ここで批判の対象になっているのは、ウォーラステインの「ヨーロッパ中心史観」的な「世界システム」論（一二〇～一二三頁）と、そのような「中心史観」を逆転させた「周縁から見る」という方法論（一二四～一二七頁）である。ただし、著者は、一旦「中心・周縁」関係を想定してみることまでは否定していない。そういう見かたを経てかまわないが、とくに中心からだけ、また周縁からだけの視点で「新しい世界史」を書いてはならないと主張しているようである。

ただし、ここからさらに先に行くと、男性中心史観への批判や、「語る」ことのできる「資源」を持たない「サバ

ルタン」の立場からの批判にまで行くことになる（二二八～二二九頁）。ここでは、歴史を「語る」こと自体が「権力」となり、またおそらく「抑圧」となる。これに対しては、著者は「だからといって、私は歴史学の存在そのものを否定するところまで踏み込む必要はないと考えている」（二三〇頁）と答えている。ここで問題になっているのは、「語る」ための「資源」を多く持っている者と、それを持たない者との非対称の問題で、『東インド会社とアジアの海』を読むかぎりでは著者はこの問題に決して無関心ではないのだが（ポルトガル船や諸東インド会社の船の航海には記録が残っているのに、ダウ船やジャンクの航海にはほとんど記録が残っていないことを指摘している）、本書ではあまり深く踏みこんでいない。しかし、文書資料の残存状況は、後に述べるような「新しい世界史」を描く際に濃密な部分と空白部分の落差を生んでしまうので、大きな問題になるはずである。現に、本書の叙述には、地球全体の歴史叙述を目指しながら、サハラ以南アフリカのうち内陸部についての叙述がほとんど出てこない（ついでにいうと、南アメリカ大陸についても、ポトシ銀山以外はあまり登場しない。オセアニアについても同様）。

ここまで、著者は、「新しい世界史」では超えるべき要素を述べてきた。この後、著者は、留保つきながら「新しい世界史」に採用しうる要素について述べる。それは、環境史（二三〇～一三四頁、ダイアモンドの『銃・病原菌・鉄』が採り上げられる）、ユーラシアの広域交流（一三五～一三八頁）、モノの世界史（一三八～一四〇頁、砂糖、香料、茶などの「モノ」に着目した歴史叙述）、海域世界史（一四〇～一四七頁）などの可能性が論じられる。ただし、それぞれに、「ヨーロッパ中心史観」が残存していること、海域世界史（これは『東インド会社とアジアの海』や『フランス東インド会社とボンディシユリ』（フィリップ・オドレール著、羽田正編訳、山川出版社、二〇〇六年）で著者自身が関わったテーマである）という歴史観も「海域世界」の「内／外」を区切る点でまだ弊害を残している

ことなどが指摘される。

そして、第四章で、いよいよ著者（と著者が属する共同研究「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」）の構想する「新しい世界史」が提示される。

最初に、準備作業として、「新しい世界史」は単数か複数か、何語で叙述されるべきかが論じられる。まず、「新しい世界史」は複数あってよいとする（一五〇～一五二、一五九～一六一頁）。これは、マルクス主義の歴史観を意識した議論のようだが、この後の「新しい世界史」像の提示を読むかぎりでは、何がその「複数」性を担保するのかは必ずしも自明ではない。次に、言語の問題では、一方で日本人（日本語を母語とする人びと、だろう）の書く「新しい世界史」は日本語で書くべきだが、「世界言語」としての英語で書くことも必要だとする。いずれにも問題はあり、日本語で書いたばあいには翻訳によって意味が変わってしまう可能性がある（それでは「世界市民」の養成という目標にはそぐわない）、英語はその語彙や語彙の背景にある世界観に「ヨーロッパ中心史観」が染みついている。だから、日本語からの翻訳には十分に気をつけるべきであるし、英語に対しては、英語の語彙やそれが表す世界観に対して自覚的に注意を促し、英語を「ヨーロッパ中心史観」を脱した「世界言語」にふさわしい言語へと変革する（著者は「鍛える」と表現する）努力が必要だとする（一三二～一三九頁）。評者はいちおうエスペランチストなので（使いこなせないが）、「だったらエスペラントを使えば？」と思うのであるが、著者は「世界語」エスペラントについては何も触れていない。エスペラントについてはともかく、「英語を鍛える」という発想は興味深いと思う。

その上で、著者は「新しい世界史」の「三つの方法」と「五つの基準」を提示する。「三つの方法」とは

（一）世界の見取り図を描く

(2) 時系列史にこだわらない
 (3) 横につながる歴史を意識する
 である(一六六―一六七頁)。また、そのような歴史叙述のなかで世界共通に注目する基準として

- (1) 法の支配
- (2) 人間の尊厳
- (3) 民主主義の諸制度
- (4) 国家間暴力の否定
- (5) 勤労と自由市場

を挙げる(一六四―一六五頁)。

このうち「五つの基準」についてはあまりに「近代ヨーロッパ」的あるいは「現代欧米」的ではないかという違和感があるかも知れない。これは、著者が、兼原信克『戦略外交原論』(日本経済新聞出版社、二〇一一年)から概念を引っばってきたためである。ここでは、たとえば、ヨーロッパが「法の支配」として実現してきたものを、世界の他の地域ではどのような概念の下で実現してきたか、というような見かたをする。そうすれば、たとえばイスラーム法の下でのシャリーア(イスラーム普遍法)の存在が浮かび上がるだろう。いわゆる朝貢貿易などは、「近代ヨーロッパ」から見れば「自由貿易」とはほど遠いものだが(それがアヘン戦争の一因になった)、では、その朝貢貿易のなかで、交易に関わった者たちは何を「公平な貿易」と感じていたのかという点を探求していく。そうすれば、朝貢貿易と一括される貿易のなかでの「海舶互市」の重要性が浮かび上がるかも知れない。もちろん、「シャリーアの支配」

は「ヨーロッパ」的な「法の支配」とは違うし、「海舶互市」だってヨーロッパ的な「自由貿易」ではない。しかし、まず「ヨーロッパと違う」として切り捨てるのではなく、共通点をまず見出し、相違点の検討は後回しにすることを、著者は提唱しているわけである（一七五頁など）。

「三つの方法」について詳しく紹介する。

第一の「世界の見取り図を描く」は、「ひとつの社会秩序とその維持を可能にする政治体制をもった人間集団」（一六八頁）を単位として、どこかに境界線を引いて「内／外」と分けるのではなく、世界全体の見取り図を描くという方法である。この「ひとつの社会秩序とその維持を可能にする政治体制をもった人間集団」という表現もミスリーディングで、普通にこれを読めば「国家」や「国民国家」、「社会契約によって成り立った国家」、あるいは「民族自決の単位としての民族」などであると解されてしまうだろう（少なくとも政治史を専門とする評者からはそう読めてしまう）。しかし、ここでいう「社会」も「政治」もごくゆるい意味である。例としては、「八世紀唐代の長安に居住したソグド系の人々」、「一七世紀フランスのカトリックの司教」、一七世紀「イラン高原の都市における銅細工職人」が挙げられている（二六九〜二七〇頁）。普通に「共同体」と呼ぶものよりもさらにゆるい結合を想定していると考えてよいようだ。「何らかのつながりを持ち、そのつながりがバラバラにならないような仕組みを持っている集団」ということだろう。これが国民国家と違うのは、一人の人がいくつもの「人間集団」に属しており、しかもその属している集団に固定された上下関係や優劣関係がないということである。そういうなかで、それぞれの人間集団の分布を「見取り図」として見ると同時に、その人間集団の内部がどのように構成されているかを解き明かす。その際に、世界のすべての「人間集団」にあてはめられるのが、先の「五つの基準」であるというわけである（二六九〜二七三頁）。

ここまでは、「いまの世界史」の延長で理解できるが、第二の「時系列史にこだわらない」では、全く「新しい世界史」の姿が現れる。つまり、「新しい世界史」では、「一六〇〇年に関ヶ原の戦いがあり、一六〇三年に江戸幕府が開かれた」とか、「一八世紀にイギリスで東インド会社の特権に関する批判が高まり、その結果、二〇年ごとの特許状審査が義務づけられ、その結果、一八三三年にイギリス東インド会社の中国貿易特権が廃止され、その結果、一八四〇年にアヘン戦争が起こった」というような、時代順を追った歴史叙述や、因果関係を追った歴史叙述が排されるのである。著者がこの「時系列史」を排除するのは、それが「現状追認」や「中心史観」に結びつきがちだからである。ある「人間集団」に注目して、その人間集団に起こったできごとを「時系列」で述べていけば、その「人間集団」は「中心」として叙述されてしまうことになるし、それがたとえば「イギリス人」や「中国人」(「漢人」でもよい)という集団だとすれば、「ノルマン・コンクエストから現在までイギリスという国は何の本質的変化もなく存在している」、「漢代の中国人は中華人民共和国の中国人まで切れ目なく連続している」という「現状追認」につながってしまうだろう(一八三〜一八五頁)。

それにかわって、第三の「横につなぐ歴史」が目指されるわけである。それは、たとえば、産業革命を、「ブリテン島の人々」に起こったこととしてのみ描くのではなく、また、それを、インドやアメリカ大陸(カリブ海を含む)・アフリカ大陸を結ぶ「三角貿易」による「商業革命」の帰結として、単にイギリス以外の要素をイギリス史の説明として援用するでもない。一八世紀イギリス社会での綿布の需要(それが産業革命の一つの大きな要因である)から、インドの綿布生産の現場に飛び、その社会がどんな社会であったかを考察し、そこから綿布を香辛料と交換していたマルク諸島へと飛ぶ。茶であれば、それを生産していた中国、購入していたイギリス東インド会社、東インド会社か

らさらに茶を購入していた北アメリカ植民地の人びとと、それぞれの人間集団を渡っていく。たとえば、一七七〇年代前半に時代を選べば、田沼意次が老中になったばかりの日本、乾隆後期の漢人社会、議会政治と人道主義に追いつめられるイギリス東インド会社、その東インド会社との関係に悩み、またそれを利用していったインド各地の王侯、そしてさらにはポストン・ティーパーティー事件と世界史を「横」につなぐこともできる。イメージとしては、(著者はこのたとえは使っていないが) ウェブページをたどりつつ、そこに現れたリンクを次々にクリックして、現れたページを集成して一つの「見取り図」に落としこむような方法である。

ここでは、それぞれの時代の「見取り図」が「時系列」を経ないで直接に現代とつき合わされる。たとえば、一七世紀のイラン高原の銅細工職人はこんなことを考えていた、では、いまのイランの銅加工業者は何を考えているのか、どうして一七世紀には重要だったことをいまは考えないのか、というように、である。それぞれの時代の見取り図を直接に現代とつき合わせることで、現代の地球社会をただ見ているだけでは見出しがたかった様相を見つけ出し、逆にその知見を過去の時代の見取り図に反映させることで過去の地球社会のあり方をまた明らかにする。これが「新しい世界史」の方法であるという(一八〇〜一八二、一八五〜一九三頁。ただし、ここに挙げた例は必ずしも著者の使っているものではない)。

最後に、著者は、概念としての「ヨーロッパ」の成立と普及自体をこの「新しい世界史」に落としこんで理解することを試み(一九三〜一九八頁)、「新しい世界史」の叙述はナショナルリズムと距離を取るべきこと(一九八〜二〇五頁)、歴史が経済の拡大・成長へと向かうことを自明としないこと(二〇五〜二〇七頁)を論じている。

本書の特徴として、第一に、価値中立的な歴史叙述という価値観を採らず、多くの「べき」論によって歴史叙述を

語っていることが挙げられる。「歴史は現実を変えるためのものである」、「現在、必要とされる歴史叙述は、地球上の人びとが地球社会の存在を実感し、地球市民となるための歴史叙述である」という明確な方向性と目標をもって述べられている。それが前提となつて、「自／他」、「内／外」を区別する歴史叙述や「ヨーロッパ中心史観」、さらにはすべての「中心史観」、「中心と周縁の区別」が排除されていく。その上で、「三つの方法」と「五つの基準」が提示される。そして、最後に「時系列的な歴史叙述を放棄する」という、ショックキングな「新しい世界史」像が提示されるのである。

第二に、「時系列」ではなく、「横のつながり」が重視されるという点である。従来の歴史叙述では、因果関係や発展史が重視され、それにつながっていたさまざまな要素は、叙述が煩くない範囲で切断されていた。そこに「内／外」の障壁が築かれていた。著者の方法は、これを逆転し（あるいは「九〇度横に回転させ」、横のつながりを地球上のあらゆる場所まで追い求めるかわりに、「時系列」のつながりを切断してしまう）。

第三の特徴は、概念としての「ヨーロッパ」を中心とする「ヨーロッパ中心史観」を徹底して排斥していることである。たとえば、著者が指摘するような、産業革命史がイギリス（ブリテン島）だけで完結してしまうという批判に対しては、そのイギリス産業革命史に、インド、北アメリカ大陸、カリブ海……の歴史を書き加えて補完すれば、地球規模の産業革命史が描けるのではないかという回答もありうる。しかし、著者はそのような「いまの世界史の延長」として「新しい世界史」を生み出すことを非妥協的に排斥する。

このような特徴を持つ著者の試みに評者は基本的には賛同し、その「新しい世界史」に期待したいと思う。

著者は「イスラーム世界」について論じることを通じて感じた問題点を苛立たしげにしるしている（二二二―二二

四頁)。「イスラーム世界」についてのステレオタイプの誤解を指摘すれば、読者はいちいちうなずいてくれる。しかし、その読者が、「世界のなかのイスラーム世界」という問題意識に立ち戻ったとたん、著者がごまごまと説明した「イスラーム世界」の特徴はすべて忘れられ、ステレオタイプの理解に戻ってしまうという。これと似た経験は中国近代史を専門とする評者にもある。ステレオタイプで構成された「世界史」の全体を見直さなければ、「イスラーム世界」についての見かたや近代中国についての見かたなど、部分的に「新しい」見解を実証的に打ち出してみても、「世界史」のなかに収まってくれない。そして、その「ステレオタイプの世界史」の中心には、概念としての「ヨーロッパ」を中心とする歴史観が存在するのであれば、それをラディカルに破壊することを目指す著者の姿勢は大いに理解できる。

ただし、二点の問題提起と、それを踏まえた一点の提案、さらに二点の補足を行っておきたい。

第一は、時系列的な歴史はほんとうに不要かということである。

評者は政治史を専門としている。政治史では時系列的な叙述が不可欠である。たとえば、「新しい世界史」方式で、一九二〇年代の、日本と中国とタイ(シャム)とイラン(ペルシア)とトルコとフランスとドイツとイギリスとアメリカ合衆国の政治体制を比較することはでき、その共通点を抽出し相違点を分析することはできる。しかし、その「見取り図」をいきなり現在の世界の「見取り図」とつき合わせても、得るものは少ないし、逆に「日本は常に官僚優位」(そのとおりといえばそのとおりだが)、「フランスは一貫して民主制」というような解釈ができてしまっただけで、危険ですらある。政治史は時系列をたどることしか叙述できないと評者は考える。

この「新しい世界史」の議論に、評者は既視感を覚える。私が大学院に進んだのは社会史全盛の時代であった。社

会史から学ぶことは多かった（と言うわりにはあまり学んでいないが）けれど、では社会史が政治史にとってかわることができたかという点、そうではなかった。同じように、「新しい世界史」が時系列的な歴史にとってかわることができるかという問題を設定してみれば、少なくとも近い将来にはとってかわることはできないのではないかと評者は思う。

評者は、先に、一七七〇年代前半の「世界の見取り図」を描けば、イギリスの議会政治の発達、先が見えない時代に入りつつあるインドの諸国、乾隆後期の中国、日本の田沼時代、そしてポストン・ティーパーティー事件が同時に見渡せて興味深いと書いた。しかし、それを興味深いと思えるのは、それらの事件についての情報を時系列的な歴史であらかじめ知っているからである。時系列的な叙述をはずしてしまつて、一七七〇年代前半の時代の「世界の見取り図」の意義がはたしてどこまで読み取れるだろうか。

第二は、「中心史観」はほんとうに不要かということである。

「中心も周縁もない歴史」を描くとしても、先に指摘した資料（とくに文書資料）の残存状況の問題は出てくる。しかも、やっかいなことに、歴史資料には多くの「自分たちの立場を正当化するために書かれ残されたもの」が含まれている。もちろん、資料は批判的に使えば、その資料が意図するのは異なる結論を導き出すために使うこともできる。しかし、資料が存在しない対象については、すくなくとも歴史学で標準的な方法ではどうにも手を下しようがない。「中心も周縁もない世界の見取り図」にも、中心と周縁は生まれてしまうのである。

「中心も周縁もない」歴史を描くのに有効な一つの方法は、著者が目指しているように、歴史観に入りこむ「中心—周縁」構図を徹底して排除することだろう。しかし、別の方法もあるのではないか。それは、あらゆる場所を「中心

になりうる場所」として描くことである。すべての場所を「中心」で埋め尽くしてしまえば、やはり中心も周縁もなくなる。

もちろん、それは独善的な自国中心主義・自民族中心主義で埋め尽くすということではない。たとえば、文書資料の乏しい場所では、考古学や民俗学などの方法が優れた歴史叙述が生まれるだろうし、文書資料が豊富に残されている場所を中心とする歴史叙述では文書資料批判がその方法の中心になるだろう。歴史叙述に特定の宗教の影響が強い場所、海に関心の強い場所、逆に海にまったく関心のない場所、それぞれ異なった方法による歴史叙述が生まれてくるだろう。そのように、数多くの場所と、数多くの方法によって、世界の歴史叙述を埋め尽くせば、それは「中心も周縁もない」歴史叙述に近づくのではないかと評者は構想するのだが、いかがだろうか。

また、これは著者には「それは日本の世界史教育に頭まで浸かっているからだ」と批判されるだろうが、それぞれのナショナル・ヒストリーが残存するのならば（著者はそのこと自体に反対はしていない）、「ナショナル・ヒストリーと表裏一体をなす世界史」はやはり残ってしまうのだろうか。本書では、日本、フランス、中国の高校教科書での「世界史」叙述の違いが強調される。たしかに、著者のいうように、それぞれの教科書で「世界史」を学んだ者がいきなり「世界史」について語り合えば、嘶は噛み合わないだろう。しかし、「自らのナショナル・ヒストリー＋外国史」という、歴史叙述の構成の全体に、世界の国・地域によってさして違いがあるようには思えない。

提案というのは、このような前提のもとで、「新しい世界史」の側は「いまの歴史」・「いまの世界史」ととりあえず対話を継続するということである。しかし、これは著者自身も（不本意かも知れないが）行っていることである。逆に、「いまの歴史」・「いまの世界史」も、「新しい世界史」の提案に関心をもち、それとの対話を行っていくこと

が重要ではないかと考える。それによって、将来、「いまの歴史」・「いまの世界史」が「新しい世界史」に吸収され発展して行くならば、それはそれでよいし、そうならなければ、「いまの歴史」・「いまの世界史」にも独自の存在意義があったことになるのではないだろうか。

最後の補足の第一点は、著者が歴史学・歴史研究に元気がない状況の説明として挙げている大河ドラマ人気、「三国志」ブーム、「歴女」現象、「萌え戦国武将」ブームなど（五、九四頁）は、とりあえず「新しい世界史」とは関係がないことである。これらの「歴史もの」に熱狂する人びとは、あるいはナショナル・ヒストリーは求めているかも知れないが、「地球市民になるための世界史」など想像してもいいだろう。これらの「歴史好き」は歴史の「物語性」に引かれている。時系列史を放棄した「新しい世界史」に「物語性」がないとはいわないが（それは『東インド会社とアジアの海』の「物語としてののおもしろさ」に接すれば納得がいく）、少なくともその「物語性」を理解するにはかなりの予備知識が必要だろう。「新しい世界史」はおそらく「歴史好き」にはなかなか好きになってもえない。それとは関係なく「新しい世界史」は必要だ、という議論でなければ、ここはおかしいのではないか。

そして、補足しておきたい第二点は、世界史が力を持ってない大きな理由の一つが、世界史の受験科目化、従って暗記科目化にあることである。結果として、受験に関係しないのならば世界史はすぐに忘れてしまふ、受験に関係があっても大学に合格すれば世界史は忘れてしまふのが常態となっている。白状すれば評者自身もそうだった。そうならば、世界史について残る記憶の大部分は、受験勉強の苦痛の思い出だけである（「過ぎ去った苦痛の記憶は快い」かも知れないけれど）。ばあいによっては、その忘れた上に、学術的な叙述としては欠点が多いが、「物語」性には富んだ、たとえばネットなどで容易に接することのできる歴史像が上書きされる。他人ごとのように書いているが、も

ちろん、この本の著者も評者も在籍している「大学」というものが、そういう状況を作り出しているのである。そして、そうである以上、現在の情勢の下では即効性のある対応は困難ではあるけれど、それはやはり大学が何とかしなければならぬし、また何とかできるはずのことでもある。